



のため、しばしば工事を中断しました。また、滝本金蔵が脳出血で半身不随となるなど、苦難を重ねていました。



▲紅葉谷を走る客馬車

完成した道路を走った4人乗りの客馬車は、豆腐売りのラッパを吹き鳴らして走っていました。それが登別温泉の名物になり、当時の落語家の橋屋円太郎が話の中に取り上げたため『円太郎馬車』としてお客さんに親しまれていました。その客馬車の運賃は一人片道25銭でした。

明治25年、輪西・岩見沢間に待望の鉄道が敷設され、登別駅が設置されました。これにより来泉客が増え、次々と旅館が開業しました。

明治32年、終生を湯守としてささげ登別温泉の発展に献身し、今日の登別温泉繁栄の基礎を築いた滝本金蔵が亡くなりました。

馬車鉄道が開通

大正2年、栗林商会を築いた道議会議員の栗林五朔が、旅館などを譲り受け、登別温泉の再開発に取り組みました。

栗林五朔は、誘客のために登別駅と登別温泉を結ぶ軌道の敷設を計画し、その実現のために大正4年、『登別温泉軌道株式会社』を設立。同年に馬車鉄道が開通しました。

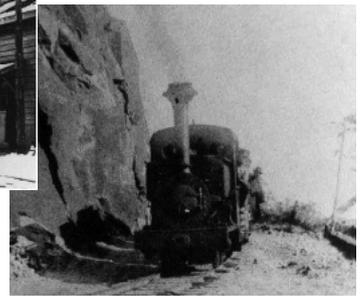
最初は馬を走らせる人や馬も不慣れなため、思うようにスピードが出せず、登別温泉までの往路は1時間20分、登別駅までの復路は1時間かかったそうです。



▲馬車鉄道

軽便鉄道が開通

馬車鉄道の開通は、当時としては画期的な交通革新でしたが、馬が暴れて脱線事故を起こすなどの問題が



▲軽便鉄道



▲大正4年当時の登別温泉停車場

発生しました。

そのため、馬車鉄道開通からわずか2年5カ月後には、蒸気機関車を走らせました（軽便鉄道の開通）。

この機関車は、最高3両まで連結しており、馬車鉄道の3倍の30人を輸送できました。

しかし、軽便鉄道の運行にも問題が起きました。それは、距離のある勾配が続くために燃料を何度も入れていたことから、煙突から火の粉が出て、野火などが発生したことです。

登別温泉軌道株式会社は、その問題を解消するため、電車への切り替えを検討しました。

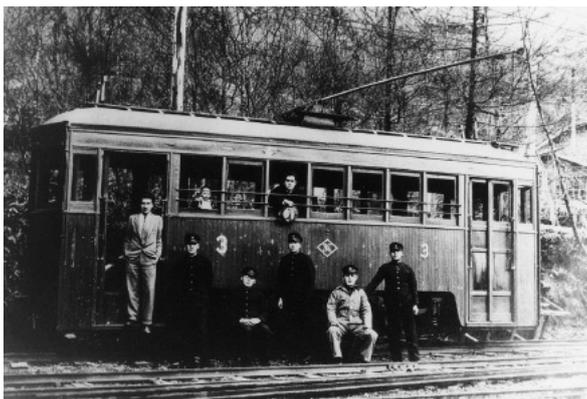
電車が開通

大正12年、登別温泉軌道株式会社は、発電設備の整備に着手し、大正14年に電車が開通しました。

この電車は、定員50人（立ち席100人）で常時2台走りましたが、満員の電車が坂にかかるると、電力を急に消耗して温泉街の電灯が暗くなり、旅館ではその明るさで客の多少を判断したというエピソードも残っています。

この電車の開通で、登別温泉までの所要時間も片道35分に短縮され、来泉客の増加につながりました。

軽便鉄道時代の1913年の入り込み客が約6万2千人に対し、電車開通後の1915年は約12万1千人と増加しました。



▲電車